

た。和尚さんは寢入端の小僧を起すのも可哀さうに思つて、自分で起きた。村の者が五六人、提燈を點けてドヤ／＼詰めかけた、「何だえ今頃……」と和尚さんは、其たゞならぬ様子に驚いて尋ねた。村の漁船は一同〇〇港へ避難、乗組も皆無事、只其中の一艘だけが行方不明といふ電報が今入つた。其一艘の安否が氣掛りであるから、聖天様のお關を頂きたいと言ふのであつた。和尚さんは直ぐ寢衣の上へ法服をはかつて、眞暗な本堂の横のお厨子に燈明を供へると、毎ものよく通る聲で理趣分を高くかに誦した。誦經の節に連れて早目に刻む太鼓の音は、シンとした霜夜の村に殷々と響き渡つた。私は未だ火の氣の残つた自分の所の火鉢に炭を注いで、庫裡へ持つて行つた、誦經が濟むと關を引いて、和尚さんは皆を連れて庫裡へ歸つて來た。

「始め凶にして後吉、枯木春光を待つとある、な、枯木は枯れ木だ、春光は春の光、枯れ木が春の光を待つて生きかへるといふ意味合だ、此お關の表で見ると、十中八九は助かるものと見て可いの。今に屹度何とか知らせがあらうで、まあ安心さつしやい。」

和尚さんの聲は重く底力が有つて、深く信するもののあるやうに頼もしく聞えた。

「然うだらあかなん……」と、皆の背後から心配さうに顫聲で言つたのはおりよう婆さんであつた。私は強く胸を打たれた。婆さん其不安な家族の一人であるらしかつた。

「まあ／＼心配さつしやるな、大丈夫だに。」と、和尚さんは重ねて言つた。

皆是最う八分通り安心をして、口々に禮を述べてゾロ／＼歸つて行く、婆さんも力無げにトボ／＼と其後に續いた。私は、一刻も早く吉い報らせがあつて、明日の朝は又、例もの元氣なおりよう婆さんに會ひたいものだと思ひから念じた。

賣り桑

水野 仙子

「今日は」とそろ／＼軒の日除けに當つて居た夕日の色が褪めかけて來た頃、泉屋と暖簾の出た店からづつと勝手の方へはいつて來た男があつた。一體此邊の屋造りは皆、表から裏へつき抜けられるやうに細い庭が出來て居る。だから大抵店と臺所の間に、この人が一般に勝手と言つて居る茶の間があつて、一寸した用事の人は大抵其上り框に腰をかけて話をする。S町と言つて東北も餘程南の方へ傾いて居り、試に地圖を廣げて見ると、青森線の沿道に當つてばつちりとした其名の町を見出すことが出来る。殆ど商家から成立つて居る町で、何屋々々、何屋の旦那何屋の娘と屋號ばかりで通つて居て、ふとした時に何屋は何ていふ苗字でしたつね、などと聞き合ふことが珍らしくない。學校へ行く子供でも、何屋の子とわかつて居ないのは、裏店の子として蔑れる連中か、若しくは地方から入り込んだ官員の子供に決つて居る。借家住居の労働人は別として、格子でも控へて金貸しをやつて居るといふ家の外は、小さかれ大きかれ皆店を持つて居る。近いところに半里と離れずに、此町を圍んで居る村々が對手なのだ。

さて今、泉屋の奥にはいつて來た男は、

「よく續きやすなア」とお天氣の挨拶をして、上り框に腰を下して股引の足を組んだ。長火鉢の前に坐つて居た盲目の隠居は聞き耳をたててお母は見馴れぬ村人なので一寸怪訝な顔をして居ると、「あー堺屋さんから聞いて來やしたかな、お宅にや夏桑の賣るのがあるつて話ですが……」

はあ」と長く返事を引いて、お母は今年もいよく時節が来たと思つた。
つひ六七年の昔まで、商業の見習ひに出て息子が家に居なかつた頃は、無人ではあるしするので店
は出さずに置いた。その代り年々人頼みをしては蠶を飼つて、幾許か纏つた金を儲へて居たが、息子
が目出度奉公をすまして歸つて、嫁も取り店も出し、何かと用も殖えたので、昔のやうに大仕掛けの
養蠶が出来なくなつた。けれども猶お母は自分の手一つで出来る位の蠶を飼つて、それで絹を織つて
は末娘の晴着を染めたりして居たが、それも一通り揃つてからは、よる年ではあるしするので二三年
この方はふつたりそれをやめて、その代りに桑を仕立てて年々それを賣るのを樂しみにして居る。
胡瓜や玉蜀黍のやうなものを少し作つて、汁の實なども大方は八百屋の手を借りずにすんだ。桑の
葉の芽ぐむ頃から老人夫婦はよくそれを樂しみにして語り合つた。かうして買ひ手がちら／＼見え出
す頃になると、仲買ひの二三人も必ずやつて来る。一貫目幾許といふのと、畑ならば幾許といふのが
あつて、買目は日に／＼値の上り下りはあれ、相場が決つて居るから大抵間違ひがないけれども、畑
となると賣り手買ひ手の見積りが違つて、お互に高く賣りたい安く買ひたいでなく／＼相談が纏らな
い。やう／＼折れ合つて手を打つたところで、仲買ひにしる直接買ひにしる、手金の幾許かを置いて
いそ／＼と歸つて行く。蠶の精がよくて桑がぼん／＼賣れる時には、午前と午後で一貫目で二三錢
も違つて来る。さうして畑の隅に風除けに置かれた立て通しの硬い葉までが飛ぶやうに賣れてしまふ
また濕氣續きで蠶の成長が思はしくなく、遣り切れなくなつて彼處でも捨てた此處でも捨てたといふ
聲を聞くと、約束済みの桑までが手金流れとなつて、いつまでも繁り合つた葉が畑に残されることも
珍らしくない。泉屋に限らず店のある家で桑畑を持つて居るのが可なりあるので、何屋はもう何處と

約束が済んだ、何屋の桑は全部賣れてしまつたなどと、仲買ひの常として方々へ行つては其家の氣を
揉ませて安く買はうとする。尤も残つたら最後一年中の手入れがふいになつてしまふのだから、賣り
手の方でもうつかりしては居られないのだ。盆前ではあり町中がなんとなく活氣がたつのは此頃であ
る。

泉屋の末娘のお豊は此節お針をやすんで居る。何や彼やと忙しく、手金の請取を書いたり貫目の計
算やらをやらせられて、また小僧が店の用で忙しくて手が離せない時など、お母と一緒に畑に出て桑
摘む女を見たりした。

明日の朝七時までには幾々貫目を摘んでくれと宵のうちに仲買のところから通知があると、小僧はい
つも提灯をつけて裏長屋の女達を頼みにやられた。土方や日雇人の嬢達が、絲を取る前の朝仕事に、
子供を連れ籠を背負つて喜んでやつて来る。

僅かばかりの時間を争つて、女どもはたわいのない話をして蓮葉に笑ひながら、淫らな唄をうたつ
たり、泣き出す子供を叱りつけたり、わさ／＼と緑の葉を動かしては繁りに繁つた畝の中にはいつて
行く。

お豊は其間に、叢を分けて毒の赤い實を尋ねたり、畑の隅に丹波酸漿を見出して喜んでりして居る
庭の上に赤兒の守をしながらお握飯を喰べて居た子供が、やがて赤兒を放つたらかして遊びに出かけ
るのを、此奴め!と追ひかけて行つて、いきなり頭を叩いて泣かせる母親や、口から泡を飛ばしなが
ら隣りの夫婦の悪口を語つて聞かせる女、むし／＼と葉を摘む音が暫く續くと、玉蜀黍畑の方を見廻
りに行つたお母が戻つて来て、

「もう大概出来たかも知れないから、貴女達、そろ／＼やめてもよからうぞい」と聲をかける。それから猶二三分はひし／＼する音が聞えて居るが、そのうちに買ひ主の姿も見え、お母が大秤衡を持ち出すと、それ／＼畝の間に置いた自分の籠を抱へ出して来る。

「さア片っぱしから」と買ひ主の男が急ぎたてると、

「さア／＼」とお母も鍾を持つて立つて居る。

「五貫八百？」と最初の聲が起ると、

「五貫八百」

「五貫八百」と順々に聲がうつて行く。

「お末さんかい、五貫八百……随分摘んだない貴女」

「五貫五百！」

「五貫二百！」

「そろ次々！」

「六貫——六貫二百！」

「ほう！誰れだい／＼」

「隣の小母さア、貴女も早く衡けて貰ひなんしよ」

「五貫！」

「五貫七百五十？」

お豊は頻りに鉛筆を嘗めて呼びあげる貫目を一々手帳に記す。各々が摘んだ貫目を附木に書きつけ

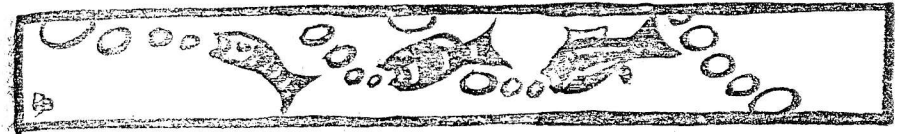
たのを貰つて、摘み達は畑のあちこちに散れて居た、子供を呼び集めて歸つて行く。空籠に赤兒を入れて背負つて行く女もあつた。畑の隅に草を折り敷いて算盤を弾いて居た仲買ひと村人が、勢ひよく手を打つたと思ふとやをら起ちあがつて、漆の樹につないで置いた馬を曳きよせる。まだ露の乾き切らぬ葉を庭に締めて兩の背に積みあげると、馬は心得てと／＼と歩き出すのを、どう／＼と止めて置いて、

「それぢやア半金だけ茲であげて置きやす、殘金は全部受渡しが濟んでからのことと、ね、ようせう、う、多分明後日の朝までに取りに来ようと思ひやすから」と赤く焼けた胸元をはだけて、首から掛けた財布の紐をくる／＼と解き、皺／＼ちやの紙幣の幾枚かを渡してから、叢の中に投げて置いた笠を拾ひあげて手綱を取る。仲買ひが猶殘りの畑の相談をお母に持ちかけて居るところへ、

「お天氣！」とぎし／＼通りかけたのは、近くの農家から桃を買ひ出して来る棒手振りである。二つの籠に満ちた其鮮かな色を見ると、無情に欲しくなつてお豊はいつも桃賣りの男を草の道に擁した。とかくして日はおひ／＼にかり／＼と光りの強さを増して来るのである。

淵れるのを恐れて大抵桑摘みは朝のうちか夕方かに決つて居た。摘み賃を渡さなければならぬので、泉屋の夕方は小錢を數へる音と我先に争ふ女達の聲が喧しかった。此時はお豊が小學校で習つた筆算がよく役に立つた。

お母とお豊の間に其様な忙しい日が續くうちに、町のうちは日に／＼ぞよめいて來て、荒物店の軒には青や赤で彩つた盆提灯が下がる。生靈棚に供へる爲めの、若布や眞菰や燈蓋燈心、そのやうな細かなもので揃へられると、佛を祭る用意を整へるために出て来る村人が、十時時分から三時頃まで



女 子 文 壇 第六年拾壹號

の間は殆ど町に一ぱいとなる。負けるゝと値切る聲、負からぬといふ小僧、慇懃く客を呼び込む聲や、出て行く客を負けるからと大聲で呼びかへす主人もある。値切るものは掛け値をするものと定つて居る弊害で、僅かばかりの賣り買ひにも甚だしく骨が折れた。

年の暮と盆前とは商家にとつては最も忙しい時である。勝手では中元の贈り物の取り遣り、お寺への勤めもあれば、お墓に燈籠をたてて花も挿さなければならず、召使ひどもに仕着せの浴衣も縫はなければならぬ。

お豊は畑に出て歸つてはせつせとよく針を運ばした。座敷まで手に取るやうに聞える町の動搖に耳を貸しながら、つひうつら／＼となりかけてははつとして針を持ち直した。人の日か自分の日かわからぬやうな日が二三日続く。

併し間違ひもなく孟蘭盆は來た。先祖へのお参りもすましてから、そ／＼一息とほつとした時に、お豊は母から纏つた小使ひと、賣り桑の利益のうちからとて日頃望んで居た羽二重の帯皮を買ふことを許された。

糊の硬い浴衣を出して、心靜に風呂につかつて居ると、いづくともなく人の心をそゝるやうな盆踊りの太鼓が響く。



海岸 井 醉 茗



ちぬの浦

ちぬの浦は泉州堺の濱と云ふ、私の故郷であるから最も印象が深い、けれども特記するほど景色が變つてゐるのではない、山遠く、浪平かに、眠つてゐるやうな内海の一部である、印象の深いのは、私が其處に生て、其處に育つたからであらう、少年の時に萬葉集を讀んで、知努男や、菟日男が、津の國の蘆屋未通女を戀したと云ふ夢のやうな歌語りが甚く私の心を動かし、見ない昔に憧